

目次

発刊に当たって	地区クラブ奉仕会委員長・情報委員長 常泉 健一
ごあいさつ	第2790地区ガバナー 白鳥政孝
ロータリー運動とは	P G 齊藤 博
ロータリー運動が目指すもの	P G 石井 亮太郎
ロータリー運動が目指すもの	P G 平山 金吾
ロータリー運動が目指すもの	P G 渡邊 隆

発刊に当たって

地区クラブ奉仕会委員長・情報委員長
常泉 健一

近年2790地区は会員減少が著しく、クラブによっては、運営そのものに赤信号が点滅している状況にあります。地区クラブ奉仕委員会でも危機感をもって、この重大な傾向をとらえています。このような事態を招いた背景はいろいろ憶測されていますが、ロータリーと言う集団の存続を保つ目的意識が根本的に崩れかけていることが、大きな原因の一つであると、指摘されています。クラブが、活動理念も哲学を持たない単なる親睦団体になってはいまいか、識者の憂いは、ここにあります。平素の活動に哲学や理念を大上段に振りかぶる必要はないのですが、活動の背景に何が期待されているかを理解していなければ、構成員の帰属意識は保てないことは、皆さんもご理解いただけると思います。

最近の教育問題が良い例になりましょう。戦後の教育が倫理・道徳の修練の場を疎かにしてきたことが、顔を背けたくなるような今日の一部の青少年の実態を生み出している、と言つても過言ではないと思います。今一度、ロータリー運動の目指す理念を再確認しようではありませんか。

地区クラブ奉仕委員会は、以上のような問題意識をもってロータリー情報研究会を開催しています。ご承知のように本年度の研究会は、地区を4地域に分けて実施しました。それぞれの会場では、基調講演として、先達のパストガバナーの方々に、「ロータリー運動が目指すもの」のテーマで、後続の皆さんに期待をこめてお話いただきました。このたび、この貴重な講演をハンデイな小冊子にまとめましたので、座右におかれて、折々の機会にお読みいただくことをお薦めいたします。

ごあいさつ

第2790地区ガバナー 白鳥政孝

本日はロータリー情報研究会にご参加いただき有難うございます。本年度は地区内を4ヶ所に大別して研究会を行うことにしました。ガバナー補佐のお力添えと地区クラブ奉仕委員会のご努力によりこのような情報研究会が実現いたしましたことに深く感謝申し上げます。

元来、ロータリー情報研究会は入会歴の浅いロータリアンに対してロータリーの思想を理解していただくための研究会であります。したがってこの研究会にはテーマを設けることはいたしません。ロータリーの歴史からロータリーの実践哲学を学ぶことが目的であります。そして、私たちロータリアンは、ともにこの実践哲学を基盤にしてロータリーの綱領（目的）を率先して推進することにあります。

ロータリーは、自己抑制心を養い、心のあり方の向上をいつも図っていますが、一朝一夕にしてロータリーの原理・原則を理解することは容易なことではありません。心の問題ですから奥が深いのです。ロータリー情報研究会を実施する主旨はここにあります。

もともと、人間を取り巻くものの中には、著しく進歩するものと、殆ど進歩しないものと二種類あります。先人の業績を積み重ねていくことが出来る科学文明などは代々進歩するものであります。ところが、感性とか心情の世界（男女の愛、親子の情愛、友情、勇気、奉仕、美的センスなど）では一代かぎりの知恵であります。この種の知恵は、書き遺された本を読んでも無駄であります。現実に経験しなければ身につかないからです。

この世界は先人の業績に積み重ねていけるような単純なものではなく、すべて本人がゼロから始めて自分の体験と実感を下に一人で積み重ねるしかないのであります。この一代限りの知恵の世界にある心の持ち方を本能のおもむくままにならないように自分を律することをロータリーではいつも学び合い、教え合っているのです。

言い換えれば、倫理、商業道徳、企業倫理をいつも学び合っているのです。一代限りの世界のものであるからこそ、繰り返し、繰り返し倫理訓に触れては、ややもすると人間の本能に基づく欲望に負けないように心を清める場所が、私たちロータリアンにとってはロータリーであります。

今日の研究会において、先人の築いたロータリーの実践哲学をしっかりと学びとり、それを自分の一代限りの知恵に加えていこうではありませんか。

ロータリー運動とは

P G 齊藤 博

I 緒言

今日は皆様ロータリーの勉強会にご出席戴きまして、ご苦勞様です。この情報研究会は、私がガバナーを務めさせて戴きました1987～88年度に始めましたプログラムでございまして、当時は年間100人前後の新入会員をお迎え致しました。このままでは烏合の衆に成りかねない。そこで今は亡き小原パストガバナーに御相談申し上げまして、新しく入られた方々に、一日も早くロータリーの真髓を会得して戴き、皆様の事業の発展に役立てて戴きたい。そういう願いを込めて立ち上げたプログラムで御座いまして、本年度で19回目を迎えます。頂戴した時間が僅か35分前後では全般にわたって話すには何ともなりません、割愛した他の項目は、後日発行されますプリントを見て戴くこととして、早速本論に入らせて戴きます。ロータリーと申しますものは、人類文化史が、20世紀の時代に刻印を打った、職業人の、最も優れた倫理運動であると言われております。従って漫然とロータリーを過ごし、食事をし、卓話を聞いて"さようなら"と言って帰って行く。これではやはり、20世紀初頭に生きた先輩たちに、大変失礼なことになろうと思えます。折角縁があってこのロータリーの世界に身を置いた以上、ロータリーの源流に生きた人達の知恵に学ぶ必要があろうかと存じます。「ローマは一日にして成らず」と申しますが、ロータリーもまた、一朝一夕にして出来上がったものでは御座いません。多くの先輩たちが英知を結集し、幾多の試行錯誤を重ねながら優れた思想を開発し、今日の偉大な組織を築き上げて来たのであります。従って私達は、これら先輩の知恵を学ぶ事なくして、現在のロータリーのあるべき姿を理解し、未来のロータリーを正しく展望することは出来ないのであります。過去の歴史を紐解いてロータリー運動の現状を正しく認識し、未来に連動して行く。其の為にも、ロータリー運動とは何ぞや、このロータリーの基本となるべき原理的原点を再確認することが大事なことでございまして、本日はこの点を主題にして、少々申し述べさせて戴きたいと思えます。

ロータリーを理解するためには、いろいろな角度からのアプローチが必要であります。今回はロータリーの歴史の観点より申し述べたいと存じます。

II ロータリー発生史

1) 原始ロータリー論

1905年、創立直後のロータリーの中心概念は相互扶助、彼らが只管こだわり続けた行動は、職業上の助け合いでありました。シカゴ・クラブのロータリアン達は、資本制

社会の基本である自由競争から起こる商人達の疑心暗鬼の気持から些かでも解放される為に、会員から同業者を排除致しました。その結果少数の例外を除いては会員の企業は発展し、経済的にも恵まれるようになりまして、貧乏商人の出世物語りであったのでございます。彼らにはこの時点では、未だ「奉仕」と言う概念に、心傾ける事はなかったのです。

しかし初期のロータリー運動にあってこの原始ロータリー論は、そう永くは続きませんでした。その理由の一つは、同業者を排除した為に大多数の職業人は、よしんば入会を望んでも許されない。たまたま入会を認められた少数の会員だけが相互扶助の利益を受けまして、大多数の職業人は世の荒波に捨て置かれたのですから、当然の事ロータリー・クラブは一部職業人によるエゴイズムの団体であるとの批判を受けました。そこでポール・ハリスは、我ら職業人の親睦のエネルギーを、挙げて世の為人の為に放流しよう。「シカゴ市の最善の利益を推進し、市民に、市に対する誇りと忠誠の精神を普及せしめること」という条項を、シカゴロータリー・クラブ綱領第三条に付け加えました。我々がここで集まるのは、世の為人の為、社会の為であると言う原則が付け加えられまして、ここでロータリー運動は、地域社会の改善に資することを、対社会的な目的とすることが、漠然とした形で、目的意識の中に加えられたのです。時に1907年、クラブ結成から2年後の事で、初期ロータリーにおける奉仕の概念が、臃げながら誕生しました。

こうして1905年、親睦を目的として始まった原始ロータリーを元として、100年の歳月を閲し今日に至るまで、ロータリー思想の潮流にも二筋の大きな流れがあったのでございます。

2) 「奉仕」 Serviceco"ceputの誕生と"利己と利他との調和"論

その一つは、1908年シカゴ・クラブに入会したフレデリック・シェルド(Frederick Sheldon)によって提唱された実業倫理的な思想であります。

シェルドンはもともとミシガン大学経済学部出身の秀才で、シカゴの町で販売学を教える専門学校を設立しまして、その資格でシカゴ・クラブに入会が認められたのでした。彼はロータリー運動が漠然とではありましたが意識し始めた、対社会的な目的に、ミシガン学派の理論、つまり「奉仕の哲学」と言う文化概念を結び付けることに成功したのであります。

シェルドンの説くところによれば、商人は利潤無くして自己の事業を成り立たせることは出来ない。しかし利潤獲得に名を借りて、儲けの為なら手段を選ばないと言うことになれば、社会が如何に醜いものになるかは誰でも判ることである。そこでミシガン大学で学んだ「利己と利他との調和」こそ、商人と顧客との間の関係を規律すべき大原則でなくてはならない。この時商人も利益を得て、同時に顧客もまた物心両面の幸せを得

ることができる。シカゴクラブのロータリアン達の正直・勤勉を前提として、商業道德の水準を挙げることに専念する姿を見て、クラブ親睦に起因する行動が、他人に対する思いやりに連なる商行為であり、この思いやりの精神は、畢竟は他人に対して奉仕することである。そこで彼はロータリーの根底にはサービスと言うことが存在することを発見しました。そして利己と利他との調和せしむる心の場、境地、これを奉仕と呼んだのですが、この奉仕の心(idea of service)の会得こそが、商取引には肝要なことなのであると考えました。

1911年、第二回全米ロータリー連合会がポーランドで開催された時、シェルドンは出席できなかったので、シカゴのロータリアンにメッセージを託し、これが大会で読み上げられました。"経営の科学とは奉仕の科学のことを言う。即ち「奉仕に徹するものに最大の利益あり。He Profits Most Who Serves Best.これを聞いて一瞬満場は水を打ったように静まり返り、次ぎの瞬間に万雷の拍手が起こり、大会決議委員長ポーランドのジェムズ・ピンカムJames E Pink hamは、これをロータリー宣言の最後に付け加えるべきことを提案し、この標語は、ロータリーの世界に君臨し始めたのであります。

奉仕の哲学を学び、これを日常生活において実践するとき、自己の努力の結果である利潤に支えられ、尚且つ地域社会から尊敬と信頼を受け、誇りをもって商的文化伝統を後世に伝えることが出来るものと考えたのであります。そしてシカゴクラブの親睦こそ、奉仕の心の会得を可能ならしむる場であるとししました。このようにしてミシガン大学経済学部で開発された奉仕と言う学理的、文化的概念が、シェルドンと共にロータリーの世界に導入されたのであります。ですからロータリアンが漠然と奉仕と言う概念を、他者に対する善意や思いやり、弱者に対する慈善行為等と推察しがちですが、より厳密に申せば、ロータリーの奉仕の原理とはシェルドンの説く、円滑かつ利益を産む人間関係の基礎的な法則を具体的内容とする「利己と利他との調和」のことを言うのだということをも銘記しておかなければならないのであります。

3)その他の原理の提唱

しかしここで注意しなければならないことは、シェルドンの立場だけが、ロータリーの本質を理解する唯一の道ではなかったと言う事であります。

ロータリー思想の他の一つの流れは、同じ19U年、ミネアポリス・ロータリー・クラブの初代会長フランク・コリンズ(Frank B collins)の提唱した"Service,Not Self"という優れた宗教的な思想であります。即ちロータリーの奉仕は自己を否定する精神世界のみをロータリーの奉仕の理念と考えたのであります。自分を犠牲にして、この宇宙を支配する神の世界の秩序体系の中に、一(いち)人間が帰依することをもって奉仕だと考えました。これは中世キリスト教神学の思想に由来するものでありまして、非常に宗教的な色彩が強いものであります。米山先生は、この考え方に基ずき行動されました。商人は常日頃の商取引の場において、利己と利他とが調和する間は良いが、もし仮に極限状況

になって、利己を取って利他を捨てるべきか、それとも利他を取って利己を捨てるべきかの二者択一の状況に立たされたとき、ロータリアン足るものは須らく利己を捨てる方を選択すべきであると言うのであります。例えば誤って不具合な機械を売ったとしたら、借金して損をしてまでアフターサービスに徹せよと言うのであります。この主張を1911年の全米ロータリー・クラブ連合会の大会で、彼はこの境地をロータリーの本質なりとしまして、これを「Service, not Self」(自己滅却の奉仕)と呼びました。この立場を取りますと、ロータリーの本質は宗教と同一である事になり、これに対してシェルドンのような立場を、実業倫理主義と呼ぶのであります。

第三に、素朴で善意のロータリアンは、難しい理論よりも善意や思いやりをもってする他者に対する暖かい行動の方が、遙かに「世の為、人の為」になると考えておりました。

以上三つの他に、第四の立場は、原理と実践との調和を大切にすべきであると言うものであります。1914年の国際ロータリー・クラブ連合会会長でありましたフランク・マルフォランド(Frank・Miholland)は、シェルドン一派の考えは、ロータリー思想は社会改良を主張するあまり、地域社会の弱者救済に比較的冷淡であること。高度の理論に酔いしれて、実践行動に移す事を等閑(なござり)にする傾向があることの批判的立場から、地域社会においては、例会で体得した奉仕の心を以て実践に励むと言う思考形式を一步進めて、むしろ特定の実践を基準にして、その原因をなす自己の境地の正当性を検証すべきであるとする立場を提唱をしました。ちょうど王陽明の説く「知行合一」と同じ立場であります。

この動きに対しシェルドン一派は、「奉仕の心」をロータリー運動の主たる目的と考えるとき、弱者救済の行為はあくまで付随的效果でしかない。また弱者救済の分野にあっては、その目的に沿った専門事業団体があり、ロータリー・クラブは側面から援助すべきであって、ロータリアンの義務は、あくまで個人個人によって行われるのを常道とするもので、クラブが団体行動を行う事は慎むべきであり、これをもってロータリー検証と信ずるは、正に理論の歪曲(わいぎょく)と言わねばならないと反論致しました。

このような理論整然たる攻撃を受けて、素朴な善意論者は唯々戸惑うばかり、心の中に強い怨念が残ることは明らかであります。

シェルドンは、1921年6月14日に、スコットランドのエジンバラで、今日の国際大会の前身である国際ロータリークラブ連合会第10回大会が開かれたときに、全世界の指導的ロータリアンの前でphilosophy of Rotary,ロータリーというのはどういう思考形態をもった哲学なのかを体系的に話しました。

平易に申し上げますと、その意味するところは、およそ企業の本質は利益の追求にあるが、その儲け高で企業経営の本質を判断してはならない。高次の次元においてコントロールする奉仕哲学と呼ばれる人間関係尊重を根底におく実践哲学の存在が必要である。利益を構成する第一のものは、同僚からの愛・尊敬で、第二のものは個人の良心と

言う高次の精神的価値を含んでいる。商取引においては、売った方も買った方も幸せにならなくてはならない。その基準は自分の利益と他人の利益とを調和させるにある。調和を図るには、ある種の客観原理が無くてはならない。これは天地の理法によって、初めて自分の利益と他人の利益の調和が可能になる。この世の事というものは、我々の感覚では認識することが出来ないある種の規則性・摂理(providence)によって、人類社会・自然は運行されている。その規則性の背後に、ある種の意志というものが働いているのではないかという考え方でありまして、これを「天地の理法」と言うので御座います。目に見えない「天地の理法」によって、自分の利益と他人の利益の調和が可能になる。すなわち経営者は、ひたすら天地の理法に耳を傾けて、自分の利益と他人の利益の調和を考えながら商売を進めて行くとき、その経営はある程度の利益を得て、同時に世の為人の為になるというのです。しからば天地の理法は何によって認識出来るかと申しますと、己自信によって認識するものであります。一人一人個人差が出てくる。良質な人、悪質な人、それぞれに天地の理法はそれなりに心に映ってくる。ロータリーの例会に集まってくるうちに、お互いの知恵を学び合うことによって相互に啓発し、次第に自分の境地が高まってくると、天地の理法もまた高い水準において体得出来るようになるであろう。それを目指して自己と言うものを改善して行こう。心の常態を高めて行こう。この努力がやがて世の為、社会の為になる暖かいエネルギーを拡げて行くことが出来る。この時企業経営と、健全な地域社会の発展とを見事に調和させることが出来るのだ。これがService Above Selfであると言うのであります。今までの"Service,not Self"に替えて"Service Above Self"を提唱し、やがて彼の思想は、1923年セントルイスの国際大会において採択された決議23-34号第1項に実を結ぶ事になります。

ロータリーとは、人生の哲学のことを言う。自己の為に益せんとする欲望と、他人のために犠牲を惜しまないという奉仕の心、この相克を調和させることを内容とするものであると言うのです。碎いて申せば商取引において、お客は物と満足を得ることが出来て、商人は一定額の金銭と感謝を頂戴する。売買という行為を通じて、心と心が交流される。倫理的、精神的な、感謝と満足と言うものを交換する。こんな関係でなくてはならないというのです。要するにロータリーとは職業人の集まりであります。そして最大の関心事は、その会員である職業人が自らの職業に取り組むとき、どういう心構えで臨み、どういう行動様式を取るかということであります。Service Above Selfと云う言葉を「超我の奉仕」と訳していますが、先に申しました観点からすれば、これは誤訳です。

「自己研鑽の奉仕」と訳すべきで、親睦の中からある種のを学び取って、自分と云うものを改善して行くことで、これによって始めて親睦＝奉仕の図式になります。Service Above Selfは、サービスを自分の頭の上に常時くっつけておけということで、奉仕とは自己改善を発生せしめる親睦のことだと心得たらよかろうかと思えます。

4)問題の最終的決着----「奉仕の実践に関する決議23-34号」

そんなわけで、ロータリーの奉仕とは何ぞやと言うことについて、ロータリーを愛する人々が集まった正統派と実践派が対立しまして分裂も招きかねない葛藤がありました。事態の赴くところ、何れかに決着を付けねばならなくなる事は必定でありまして、この事態を迎えたのが1923年の事、ロータリー運動の本質は何か、ありとあらゆる思想の対立を調和させようと言うことで、時のシカゴクラブの会長ウィリアム・ウエストバーグ(William Westberg)とナッシュビルクラブのウィリアム・メニアー・ジュニア(William Manier Jr)の起草によって、原理と実践を体系的に纏め上げ、ミズリー州のセントルイスで開催された国際大会において、第34号議案として提起されたのでございます。故にこの決議を「1923年の決議第34号」と呼ぶようになります。「奉仕の実践に関する決議第34号」なのでございます。2004年手続要覧76頁に記載が御座います。決議の冒頭に「一人一人のロータリアンが千差万別の社会生活において、奉仕の心を実践に移すことを言う」と記されておりまして、言い換えれば、この社会奉仕と言う概念は、今日のクラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕の総てを包括して、各ロータリアンの行動の面から捕らえようとする表現方法であることが分かります。この決議34号は、これまでの議論を集約して、原理と実践の調和の立場から明快に解決を付けた理論的集大成でありまして、これを見ますと、ロータリー運動は誠に高尚な文化性を備えた原理運動である事が、自ずから明らかであろうと思うのであります。

今日どのロータリー・クラブにおきましても、現実の実践課題に直面して、「ハテ、ロータリーは一体何ぞや」と問う時に、必ずや、単純明快に原理についての解答を与えてくれるのは、この決議23-34号なのであります。1から5までが総論で、6が各論となっております。大略を述べますと、第1は、奉仕の哲学。第2は奉仕の実践をする会員の団体が、クラブであること。第3は国際ロータリーの存在目的。第4が時代に適應するために必要な事項として、クラブの団体行動のあり方。第5が、クラブの社会奉仕活動は、クラブが自主的に選ぶことについて、絶対的な権利を持つ。そして国際ロータリーは、クラブの社会奉仕活動を命じたり、禁止したりしないこと。第6にa～gの7項目ありまして、クラブの社会奉仕活動は、実践課題であるとして、クラブの団体奉仕のやり方を示しております。この中で特に大事な点は76ページの(2)、本来ロータリークラブは…と始まり、機能が記されております。ロータリークラブは4つの機能を持つ社交団体であります。

第一に、ロータリー哲学をロータリアンに親睦活動を通じて教え、団体に学ぶこと。

第二にその哲学を、地域社会にすべての社会人に宣言する。

第三に、ロータリアンは、クラブを離れた場所で、ロータリーの哲学を世の為、人の為に千差万別な社会状況の中で実践して戴く。

第四に、クラブは任意の事例を捕らえて会員の教育作業、地域の人々の公德心の育成のために、財源の許す範囲内で、奉仕の実践プログラムを企画立案する。

即ちクラブは、ロータリーの理論を教える。地域社会で職業倫理訓を宣言する。理論

を習得したら、実践すること。クラブは補足的に会員の教育、地域の教育の為の事業計画を企画立案する、この四つだけでございます。

その後1927年に至り、国際ロータリー理事会は、決議34号によって我々は原理と実践との調和の原則を開発した。これからのロータリーは、既に原理を把握した以上は実践の世界に入って行こうと言う提唱となって、総合企画委員会制度を設けて、此のとき奉仕の四分法、クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕を各クラブの事業計画に取り込み、それを管理する委員会を作りました。

1960年になりますと、国家と国家との対立とは異なる地球上の全人類の貧富の格差の対立が起こり、これに対する問題の自覚がなされまして、1968年「世界社会奉仕」と言う新しい概念が出来て、ロータリーの思想はここに完成を見たのであります。

このようにしてロータリーは、1923年に原理のロータリーを踏まえて、さらに実践のロータリーへと一歩踏み出し、以来87年の歳月を閲して今日に至っているのであります。

5)各論

R I (国際ロータリー)

R Iとは何かと言うことに触れておく必要があると思います。1910年全米ロータリー・クラブ連合会、1912年に国際ロータリー・クラブ連合会と改められ、ついに四十二年国際ロータリーと呼ばれるようになりました。R Iとはロータリー・クラブの連合体であって、上部団体ではありません。役割は奉仕哲学の解明、ロータリーを奨励し助長し拡大するという事で、連絡調整機能が与えられて、クラブの情報を他のクラブに伝える情報媒介の役割を持つようになり、更に1922年に直接監督権が与えられました。これはクラブが、国際ロータリー定款・細則・標準クラブ定款に違反した場合にのみ行使することができます。従ってクラブがこの規約に違反さえしなければ、クラブに対して何の命令権もありません。

R Iが色々なテーマを挙げたり、目標を定めたりしているのは、あくまでも皆様方に対する要望であると言うふうに理解戴きたいと思います。1992年の規定審議会では、社会奉仕に関する新声明として、決議92-286が採択されました。これは個人奉仕と共にクラブの団体奉仕を奨励し、更に国際ロータリーが積極的に奉仕の実践を提案することが明記されておりまして、徐徐であるがロータリー運動を他団体と共同の団体奉仕が可能な方向に軌道修正しつつあることが伺えます。

職業奉仕;奉仕の四分法、クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕がありますが、特にロータリーの職業奉仕について一言で申し上げますと、ロータリーの職業奉仕と言うのは倫理概念、そして道徳的概念でありまして、碎いて申せば「清い金を稼いでこい」ということなんでありまして。金銭と言うものは、最も自由に、転々流通する。どんな路を通るか判らない。自分が得た金銭が、若し盗んで来たものなら汚い金銭になります。

〈悪銭身につかず〉。そうじゃなくって、自分が清らかな労働を投下する。お客さんに対して暴利をむさぼらない。アフター・サービスを必ずする。物売る時は、物と満足をお売りする。代金を頂戴するときは、一定額の金銭と感謝を頂戴する。物と金銭の交換と相俟って倫理的な精神的な感謝と満足と云うものを交換する。これを同時併行的に行うものを職業奉仕という解説をしている例もございます。

また会社の部下に対しても、彼らの幸せを伸ばしてやるような形で人事管理が出来ないか考える。ロータリーの説こうとする職業奉仕というのは、実はこのところがコツなんで、今年度は不況だった。収益は上がらない。だけど信用が植え付けられているから、固定客が増えて来て、これは十分に、二年度から毎年回収が出来るといいう状況が出来たらそれでよいのです。だからいくら儲かるということ、ロータリーは何も問題にしていない。しかしこの方法を行えば儲かりますよ。信用が高まる。固定客が出来ますよ。景気の変動の支配を受ける事なく、安定した収益が上がって参ります。これがシカゴの会員が僅か五年の間に、超一流の企業家に成功した所以なんであります。

"He Profits Most Who Serves Best"2004年の規定審議会でThey Profit Most Who Serve Best"と変更になりました。「最善の奉仕を行う者に、最大の利益あり」「儲けんと欲すれば、まず奉仕に徹せよ」。ロータリー的な考え方というものは、儲けに通ずる訳であります。そればかりではない。社会的地位も上がりますし、また従業員は胸を膨らませます。

例会出席

次は例会出席ですが、ロータリアンが毎日の企業の現場におりまして、いくら倫理的といっても、時々倫理的な行動の決定や、内容について疑問を持つことがあるはず。疑問を持つからこそ例会に集まって、会員同士で話し合っ自分の職場に戻る。自分のやり方が正しいという自信があったら例会に出て、他の会員にその技(わざ)を伝える。クラブ会員が相互扶助をやるのはこの為なんで、ロータリアンにとって、例会無くしてロータリーはない、と言わねばなりません。ロータリアンは他のロータリアンと孤立しては成り立たないのです。その人を通じて、同業者にロータリアンの商法の正当性、優秀性が示されなければならない倫理的な義務が、各ロータリアンに課せられるわけです。

一業一会員制

現在はR I 定款第5条第2節bにより一クラブ5名の正会員が認められておりますが、以前はクラブには、一業一会員制の原則がありました。ポールハリスが「職業人の親睦団体を作ろうと思うが、賛成してくれないか」とシルウスター二云ったところ「職業人はお互いに相争い競争をしなければ自分の技術を開発して行けない。競争するが故に相手を破滅させる可能性を持っている。心の中に警戒心が湧いてくる。職業人の社交クラブなんてとても無理だ」と云ったのでポールは、「そんなら一つの職種から一人だけと

ればいいじゃないか。そうすれば気分も開放的になるし、これでやろう」と云うと「そんなら出来そうだ」と賛成してくれたということです。

これがどうですか。一業一会員制の原則が一業多会員制に移行しつつあるから、ロータリー運動はニツツチモサッチモ行かなくなる。良質な親睦を実現するためには、この点は譲るわけにはゆかない。本当に程度の高いロータリーを作ろうと思ったら、一業一会員制の原則を遵守することが大事であります。ロータリーの奉仕の為、会員の質の保障の為にも、基本原則と考えられるべきだと思います。皆様はロータリーにお入りになるときに、「貴方はこの地域の代表的職業人だ。ロータリーはエリートの集まりなんだ」と言われて入られた方も居られるかも知れません。確かに職種の代表だというのはですが、選挙で勝って入った訳でもない。

初期のロータリーではこのことが大問題になりまして、一業一会員制の本質如何。アメリカのアラバマ州のバーミングハム・クラブはこの解釈について、ロータリーが、皆さんを、皆さんの職種におけるロータリーの代表としてお送りしているのだ。職種の代表なんじゃないのですよ。我々は例会においてアイデアを交換し、職業人の正しい商法という理念を追求している。この考え方を、ロータリーの代表として、自分の職業分野に伝えるべき義務をもった人なんだ。つまりロータリーの代表としての義務がある訳であります。

地区リーダーシッププラン

2002年-2003年度より世界全地区に義務づけられた。ガバナーは複数の(6名以上)ガバナー補佐を任命できる。各補佐は4から8クラブを担当することが奨励されている。ガバナーを補佐し、公式訪問時に相当するクラブ協議会でガバナー代理を務め、撞当地域クラブを月1度、少なくとも四半期に1度は訪問し、クラブ会長の計画と活動を助言支援する。資格は

- 1.クラブ会長を全期務めた人
 - 2.将来の指導者として有望であること
 - 3.地区レベルで顕著な活動歴があること。
- 一年一期制で、三期を越えないこと(三年留任可能)

クラブリーダーシッププラン

地区リーダーシッププランの基本概念をクラブレベルに適用して、効果的なロータリークラブの不可欠な要素として

- a)会員基盤を維持し、増大する。
- b)地元社会及び他国の地域社会のニーズを取り上げた成果溢れるプロジェクトを実施する。
- c)資金の寄付、プログラムへの参加を通じて、ロータリー財団を支援する。

d)クラブレベルを越えてロータリーで奉仕できる指導者を育成する。

クラブが独自のリーダーシップ・プランを作成するのを支援することが、現在、DLPの構成要素の1つとして義務づけられている。

Ⅲまとめ

こうしてロータリー運動が今日の発展を迎えた原動力は、先輩ロータリアンが優れた原理を開発し、それを遵守したからであり、ロータリー哲学を根底においたクラブであったからであります。最近のロータリアンは、ロータリー・クラブにいながらロータリーの基本的な哲学を理解する機会も少ない。

1)ロータリー衰退の理由

今ロータリーの悲観論が套いております。その原因の一つは、1968年から1970年に起こりました。当時ゾーン制度が出来て、2年に一度国際ロータリーの理事を出すことが出来ますから、理事を出したいばかりに、そのゾーンの分け方について規定審議会で荒れました。このことが、国際ロータリーのつまずきの原因の一つになっのです。

今一つは1978年、クレム・レヌーフ国際ロータリー会長が"手を差し伸べよう"と云うテーマのもとに3Hプログラムを提案し、やがて全世界のロータリアンから募金して、組織全体を向けたポリオプラス計画実践へと進みました。本来ロータリアン個々の奉仕活動の実習課題として考慮されてきた団体奉仕活動が、ロータリーの拡大と共に次第に個人の手から離れ、組織としての活動を目的に動きはじめたのです。その結果、クラブ内の哲学的啓発運動は、賑やかな国際奉仕関連分野の活動の陰で色褪せようとしている傾向が見られます。日本の指導者もロータリー精神に忠誠を誓うべきなのに、ロータリー精神より国際ロータリーに力を入れたところに、ロータリーに歪みが出来ました。

加えてロータリーを特徴付ける規約を次々とゆるめ、クラブの特徴を失わせ、会員の高齢化による活力の低下、また若者のロータリー離れが、クラブを弱小化させたことにあります。一方近年政府や自治体の青少年国際交流活動、ボランティア活動などで、ロータリーの独壇場であった海外留学を含めた奉仕活動の新鮮味が失われてきたところに、日本ロータリー衰退の原因と考えられます。

2)ロータリーを高める道

イ)本質にある制度の再確認(一業一会員制・例会出席)

私は、ロータリーを高める道は二つあると思います。一つは、ロータリーの本質にある制度「一業一会員制」「例会出席」を再確認し、それを確立することにあります。この二つは、ロータリーの核になる原則で、この二つのどちらかでも欠けたなら、それはもうロータリーとは言えなくなります。今、大事な局面であります。現状を見て下さい。

四回以上欠席したら首だという鉄則があったのです。今はクラブ定款第11条第4節、理事会はその欠席が会員身分の終結を要請していると考えられる旨通知する。その人の意志が大事だ。幹事さんがその人を訪ねて、ロータリーに籍を置きたければ、会費を払えよと告げる。こうなったらこれは大分墮落したことになるでしょう。例会に集まらないということは、心の通う原因を、貴方の良心によって切断することになる訳です。

ロ)自己研鑽(自己啓発)

今一つは、その確立された制度の中で、ロータリアンが只管心を磨くことであります。ロータリーにおいては一業一会員制、職種が違うから職業管理の経験も違う。経験が違うから思考内容も違う。異なるものとの接触と云うものには、発想刺激の要素が十分に含まれております。だから医師がデパートの発想を学び、デパートの社長は学校の先生の発想に学び、学校の先生はお寺のお坊さんの発想に学ぶ。お互いに発想が違うから、進歩が質的に図られて行く。その人の社会的管理法にも影響をしていくことは明らかで、これをロータリアンでない総ての人達に放流する。これがロータリーの第一義なんで、綱領に企業の根底に奉仕の心をおくと記されてあります。よく「例会では奉仕奉仕と堅苦しい話はやめて、楽しい例会にしよう」と言う御仁がおられます。「まず会員同士の親睦が大切だ」と言うのですが、ロータリー運動が志向するのは、表面的社交に止まる「感性的親睦」ではなく、異業種の良質な職業人の人格の触れ合いを媒体とした自己改善を内容とする「精神的親睦」であることの自覚が必要かと存じます。今やロータリーの奉仕が、施しの奉仕に陥ろうとしている危険に直面している現状にあって、何よりも望まれる所であります。心の友を造って、関係概念の自覚を深め、それをもって企業管理に反映させてゆくにはどうしたらよいのか、そういう発想を広めて行くのがロータリーの目標であり、第一義であります。

3)ロータリー運動とは

ロータリーは何時も新たなる発想のもとに、その時代の流れにふさわしい活動をしなれば、時代と共に生きるロータリーとは言えないのでありますが、いくら時代が変わろうとも、実践を起さしむる基になる考え方は一つでなければならない。変わるのはただこれらの原理を、現在の情勢と時代の必要に応じる為の実際の適用面だけであります。時代がどんなに変わっても、その人間の腹構えを教えてくれるのは、哲学であり思想であります。どんなに社会が変わっても、変わってならないものをじっと持って、それで社会のリーダーシップを発揮しよう。自分の腹構えが同じで、その腹構えがあるからこそ、渾々と新しい発想が湧き出てくる。そういうものを持つから、千変万化な社会状況の中で、自分の企業を自由競争の場に於いて、いつも勝利の方に導いて行く事が出来る。そういう管理者たるもの知性が出てくるのじゃないかと思うんであります。庶民の哲学、市民の哲学と言われるロータリーから、こういう腹構えを学ぶのであります。その為に

も私達は常に、かつて我々ロータリーの先輩がロータリーを通じて開発した良質な思想を、その心を汲み取りながら、その延長線上に物事を考えて行く姿勢が大切だと思います。いやあれは昔のロータリー、俺たちは今に生きている。いつまでも決議23-34号じゃ駄目だよと言う人も出て来ました。そんなに相手に対して則を変えて行ったら、自分の二度とない人生を管理する自分の内なる心の良質は、一体どこにあるのでしょうか。しかも社会の指導者と言うものは、自分一人で生きてないんです。必ず同業者、従業員がおる。そういう人達の、幸せ不幸せを直接間接自分の思考で守って行く。そういう責任感を考えたら、この辺の事を今少し揮を締め直してかからねばと思うんであります。これが確信がないばかりに、ロータリー精神の希薄化、クラブ例会のマンネリ化、ひいてはI serveなのかWe serveなのか分からなくなる。ロータリーの実践と申しますものは、根本的には個人奉仕なのあります。ロータリー運動の中心は、制度的にはロータリー・クラブであります。さらにその中心はロータリアンであります。例会その他の会合の中で、他のロータリアンから色々と学び、自らを高めていこうという意欲をもって、そのロータリアンが自分の心の中に宿る良質な奉仕の原理を心の中に入れる。体得する。それをもって自分の管理者的な能力を通じて、社会管理の手法の中に管理者的手法を入れて、広く世の為人の為に行動しようとする運動のことを、ロータリー運動と言うのであります。

日本のロータリーの生:みに親であります米山さんは、「ロータリー・クラブは正確な意味における奉仕クラブとは言い難い。なぜなら、クラブの名前をもって奉仕することは例外で、ただ会員の自覚管に接続する。マンホールの上に置型トイレを置き、その上をテントで覆うというものが販売されているのだそうです。

これをロータリーの社会奉仕活動の事業として実施しようという提案なのです。行政に提案することは重要なこと存じます。しかしここで、国家、地方自治体、ロータリー各々の考え方をゴッチャにして物事を考えるから、この点は特に注意しなければならないことで、我々はあくまでロータリーのdimensionにおいてのみ、一つの機能を果たすのだと言うことをよく認識しておかなければなりません。社交クラブとしての固有な機能、それはあくまで職業を離れた暇の活用なのであります。本職と離れたところで、そういうエネルギーを活用しようとする動きであって、ロータリー・クラブがどんなに進化致しましても、地方自治体になったり、国家の機能を代替するものではありません。

ロータリーは自らの可能性の範囲で、社会的又は世界的な問題の為に行動するのでございます。しかしロータリー独自の社会改良の行動の分野は、洋として広がっているのでございます。

IV結び

ロータリーは良質な思想をもっております。良質な思想は人を説得致します。人を説得致します良質な思想をは、武力を使わない一つの社会的な力になります。チャールズ

C・ケラー国際ロータリー前会長は、「兵器を使う事なくして、恒久的平和を見つけることが唯一の至上命令であるという時代が来た」と述べられました。政治を促す為に行うのだ」と申しました。ロータリーが奉仕するものではありません。あくまでロータリーと言う組織の中にある一つ一つの細胞でありますロータリアンが、個々に与えられた職業、即ち専門職の分野で、ロータリーの心の実践をしていくんだと言う事を忘れてはならない事であります。

4)ロータリー奉仕活動の注意点(限界)

今一つ、ロータリーと言うのは社交クラブなのであります。制度化された社会の中で、ロータリー・クラブと呼ばれる社会を、国家であるとか、自治体であるとかと混同して考える人が余りにも多いのでございます。

ロータリーは社会改良のエネルギーを放流するが故に、ロータリーはロータリーのdimension (次元、規模)において、社会改良のエネルギーを放流する。国家は国家のdimensionにおいて、社会管理のエネルギーを放流する。地方自治体は地方自治体のdimensionにおいて地域管理のエネルギーを放流する。この辺の事どもは、社会奉仕、国際奉仕を議論したりするときに、ロータリーは時に大変な過ちを犯すところでございます。

これは以前当地区のクラブのロータリアンであった方の発案なんです、各地の大震災に見るまでもなく、災害は突如としてやって来ます。そのようなとき一番困るのはインフラの破壊によるトイレが使えなくなる問題です。こういう時に使える災害時使用可能なトイレの設置』の件ですが、公園等に配管、マンホールを設置し本の力とロータリーの良質な原理思想の力とは、其の社会的機能としての本質、対応が異なります。ロータリーの奉仕哲学の理論から、国家を越えた奉仕の実践を行う。武力を使わないある種のクールな力を地球上に蔓延させて、恒久的な平和と繁栄をもたらす事が出来るのだ、ということをお我々は強く信じて、活動して参りたいと思います。その使命はロータリアン一人一人に課せられている。その思想は何処で出来るのか、例会出席で出来る。そんなロータリーに蘇ることが出来ますれば、ロータリーは21世紀に向かって大きく開けて行くものと確信致します。ご清聴感謝致します。

ロータリー運動が目指すもの

P G 石井 亮太郎

皆さん今日は。今日は白鳥ガバナー、地区情報委員長常泉さん初め委員の方々、ガバナー補佐の皆様と、7, 8, 9, 11分区のロータリアンの皆様がお集まりいただきました。そして此処の会場設営に関しましては、当神宮の高橋先生が全ての準備をなさって頂いたそうですでありまして感謝を申し上げる次第です。本日私が出向いて参りました訳は、白鳥ガバナーから電話を受けましてお伺い致しました。本来は地区の申し合わせでこの様な会合にはガバナー経験の年度の若い方達が担当することになっておりますが、なぜ私なのか、とも思いましたが白鳥ガバナーを擁立するために私もその一端に関わりましてあなたがガバナーになられた場合私は出来る限り協力と支援をさせていただくから、と説得した折に申し上げ、決断をして頂いて今期のガバナーとして活躍をされておられますその方からこちらに伺って話しをしてほしいと申されますとお断りすることが出来ない訳でありまして出向いて参りました次第であります。さて本日の基調講演に頂いた演題は、「ロータリー運動が目指すもの」は何か、ということであります。既にご周知の処であると思っておりますが、ロータリー運動が目指す処は、地球上の全人類が平和で幸を培う共存共栄地球社会の構築を目標に置いて、ロータリーでなければ果たせない分野で実践活動を通じて目的達成に向かって努力し貢献して行こう、というものであり演題に関しての結論であります。そこで考えられることは、ロータリーが、ロータリークラブがそして個々のロータリアンがどの様な考え方で、どの様な行動をもったなら目標に向かって歩むこととなるのか、目的を果たすことに連なって行くことが出来るのか、これが非常に大事な処なのであります。ロータリー思想には権力や数と力の論理で奉仕の実践との適合を考えず、或は金銭に主体性を置く実践活動を主流におかず、奉仕の実践に関する補助的手段としてのみ位置付けられる原理論と哲学を開発して来たもので、奉仕の実践の主体性は個々のロータリアンの精神性を中核に置いた行動体系に基盤を置く考え方にロータリー運動の本質を見る事が出来るわけでありまして。奉仕の実践に関しては基本的に個人の行動を通じて実践が果たされなければならないものでロータリーとして団体で果たす実動はあくまでロータリアン個人に対し、或は周囲の社会の人々に対して奉仕の有り方を示唆する、即ち導火線的役割を果たす手段として考えられていることはご周知の処でありましょう。ところで昨日館山ロータリークラブから会報を御恵送頂き拝見致しました。その中の一部に本日こちらに御出席の地区情報委員長常泉さんの卓話が載せられておりまして、見事にロータリー論理を語っておられ、私も大いに敬服を致した処でありまして、地区情報委員会に素晴らしい論客がおられるのになぜ私如きがこちらにお伺いするのかと多少躊躇しつつ出向いて参りました次第

であります。館山クラブから入手され御一読をお勧め致します。

また本日お見かけ致すところ会場内には当地区内の論客の方々が多くお見受けされる処で、ロータリーに魅せられたご熱心な方々が多くお見えでございまして、佐原クラブの石橋さんのお元氣なお顔も拝見し嬉しく感じているところでございまして、石橋さんもロータリーに魅せられたお一人であると思っております。いつまでもお元氣に御活躍くださる様願っている次第であります。ロータリーは毎年ガバナー職を担当される方を選出しなければなりません、当地区では白鳥さんの次にガバナーをお努め下さる方が未だに決まっておらず、北原 P G が地区指名委員長の年度から次々年度のノミネーまで選出しなければならない様に規定が変わり任命権者である白鳥ガバナーも心労されて居る処、先程白鳥さんにお聞きする処に依りますと次々年度の候補者が繰り上がって次年度担当して下さる様になるようで白鳥ガバナーも安堵されて居られる様に感じました。それもさる事ながら当地区におきましては近年会員の数が著しく減少致して居りまして私の担当致しました年度、4370名であった会員数が白鳥年度では3500名で地区予算の編成をされた処この数値をも若干割り込んだ時点もありましたそうで憂慮する処でありまして、この現象は単に不況の波に依る現象であるばかりではなくてロータリーの魅力を感じとれない方達の心放れが起きている処もあるのではと感じている私も一人であります。或る意味では衰退に繋がる現象ではと受け止められるものであり、ロータリー運動に魅せられて本日お集まりの皆様も私も含めてロータリー運動を支え発展させていく努力が必要ではないでしょうか。そこで私はガバナーを努めさせて頂いた当時 RI 会長のブラウンさんがテーマに掲げられた“真心の行動、慈愛の奉仕、平和に挺身”と呼びかけられた処をアナハイムの研修会で学んで参りまして、この提案はロータリー運動で必要と考えられる本質を説いているものと理解し帰って参りました。地区83クラブの訪問を通じ会員の皆様に、今年は本質に根ざしたロータリー活動を推進して下さいと説いて歩きました。そこで運動の本質は何かを熱を込めて語り、或る時は大変長時間を掛け親切心が余って延々日没まで語り合ったことも度々で、あいつの話は長すぎると批判も頂いた節もありましたが、中には話を聞いて目から鱗が落ちた様な気がすると言って下さった会員さんのいたクラブも結構ございまして。然かし乍ら私の話は長いという定評は通例でありまして現在も未だその域を脱していない処は進歩がないのかと反省も致しますが浅学非才の成せる術とも思っておる処でございまして。自分で納得が出来るまで語らないと気がすみませんで私の長所とも短所とも言える処と自覚致しております。今日は時間内で話を了える様心掛ける心算でおりますが多少の処はお許しください。ロータリー運動が遠大な目的を理想に掲げる処に辿り着くためのこの運動の根幹に置かれているものとは何か、でありますそれはクラブ奉仕にあるクラブ運営と毎週の例会で育まれる親睦の中で果たされるロータリアンとしての心の育成、即ち自己を研鑽するための異業人の交流に始まる訳であります。これを避けるとロータリー運動は成立致しません。ここが全ての出発点でありますその延長上に奉

仕或いは奉仕の実践が結びついて来るという考え方がロータリー思想であります。本日
手続き要覧を持って来られた方はいらっしゃいますか、一寸御覧頂きたいのであります
が、その中に社会奉仕に関する決議23, 34号という項がございます。これはロータ
リーにありましての一大ドキュメントである決議案の採択であるといわれておりまし
て1923年にセントルイスの国際大会において34号の議案として提案されたもの
で起草者はテネシー州ナッシュビルロータリークラブのウィリアム・マニアー・ジュニア
ーとシカゴロータリークラブのウィリアム・ウエストバーグという二人のロータリアン
の起草に依るものと聞き及んでいますが、1923年以前のロータリー理論の体系は二
分類法に基づいて起案されておりまして、即ち親睦＝奉仕、奉仕の実践、考え方を二つ
に区分した中で全ての社会生活にこれを適用する発想で書き留められております。ロー
タリーとは何か、奉仕とは何か、ロータリークラブとはRIとは奉仕の実践とは何か諸々
の事が記されております。内容の解説に触れる事は時間の制約がありますので略しま
すが後々お読み下されれば結構でございますが、1927年には行動の体系を4区分致しま
した。実質の効率化を促進するための手段を明確に表示した4分類法が提案され採択さ
れたものであります現代では、両者を併用することが求められておりまして、23-3
4のコミュニティと記されている解説は、あらゆる全ての社会と解され、1927年の
4分類のコミュニティは、地域社会を表す提示であり併用を推奨されているのにはこの
辺りの意味合いがあるからでありまして、ロータリーに関して不可解が生じた折りは、
これを繙かれることをお勧め致します。私も幾度となく読み返しております。4分類で
はクラブ奉仕、社会奉仕、職業奉仕、国際奉仕と示されております。それぞれの国のロ
ータリアンが自国即ち国家に対する奉仕という概念をロータリーは持ち合わせており
ません。地域から国を超えて世界地球社会へと思考が移行するという発想で動く様にな
っております。地球は一つの社会、地球上の国々は全て一体化して考えるという発想に
基づく処でありましょう。そこで国家論を議論することが必要と思っております今日は省略
し別な機会に譲ると致しますが、マルチン・ルッターの理論には国家とは国民の総体+
 α であるという定規が示されています。またカルビンの理論には国民の総体であり個々
の国民に宿る善意の総体とも説かれ α を必要とせず善意が漲る処国家は繁栄発展する、
国民は国家の分身であるという説もあるようであります何れも宗教哲学から生まれた
理論でありましょう。中世において隣人を愛せと教を説くキリスト教徒が自己の正当
性を主張するために神教徒に制裁を加えて30年も続いた宗教戦争が起きた歴史もあ
り、ロータリーの創始者ポール・ハリスはそれらは人間世界が持つ悪因念でありロー
タリーはその悪因念を断つために如何なる時も団結をしない事を持って地球社会を住み
良い社会にするために貢献するのだと、言われたそうであります。ロータリー思想に流
れる個人に主体性を置く奉仕の実践哲学が尊重されるのもその様なポール・ハリスの主
張に帰属する処と申せましょう。一人の力は弱いから団円でスクラム組んで金銭を駆使
して世の中を良くしようという発想持つのがライオンズ思想でありまして、その様な発想

に順じないのがロータリーであります。個々のロータリアンが例会で育むロータリー奉仕の心の成長と共に出来ることを、出来る処で、出来るだけ行動を通じロータリー精神をシェアする処にロータリーの功德が実り全ての社会に潤いがもたらされ全地球社会が平和で豊かな人類の生活の場となるでありましょう。私達には生命の限界がございます、何日までそれを続けるかとを問えば、先輩ロータリアンでありますガイガン・デイカーは申しております、ロータリアンはこの世を去るその日に至るまでロータリー運動を推進する事に依って初めは金メッキの様なものであっても5年10年20年50年と続けて行う中に真に純金の様な輝く価値を見出す事ができるのだ、と。ロータリーに魅せられお集まり下さった皆様これからも大いにロータリー思想を信じて奉仕の実践に向け努力を傾注していこうではありませんか。其の最も重要な規範はクラブ奉仕の中に有ると云うことを認識下さいます様に。持ち時間も少々過ぎました。これで私の話は終わりたいと思います。御静聴ありがとうございました。

総評

講評につきまして4名の発言者お一人お一人に私の所感を申し上げお聞きとり頂けておりますのでこの紙面では省かせて頂きますが、総評としてそれぞれの曲面でロータリーをとらえロータリーに魅せられ頑張っておられるご様子で聞く人の肌に伝わって来たものと感じております。今後に向ける情熱を伺い知ることが出来た思いでありまして誠に心強さを感じさせて頂きました。御発言者の方々には御自身のクラブ内の核になられて、ロータリー運動が健全に推進して頂くために献身下さいます様に、また御来会下さった皆様方も本日の議論の中の何かを理解され共にロータリー運動の存在が意義あるものとするためにご健闘下さることを強く願うものであります。

「ロータリー運動が目指すもの」

平山金吾

Aブロック情報研究会

Aブロック1,2、10,12,13 分区の皆さんご苦勞様です。従来は各分区ごとに行っていましたものが、昨年は地区全体で開催し、今回はブロック制で開催する事になったそうです。初めての試みとして成功を祈ります。

今回のテーマは「ロータリー運動が目指すもの」と言う事であります。では過去100年は何を目指して来、今後のロータリーが何を指すのかということとします。従って先ずロータリー100年の歴史を振り返ってみましょう。

その前に、皆さんが今ロータリーは会員も減少し、どうなっているのかと言う心配をお持ちだと思います。私はロータリー第二世紀の出発点に立ち、先ずは会員の資質の向上を叫びたい、ロータリーの綱領、職業宣言の盛り込まれている会員としての資質の条件を持つ者だけの会にしたいと念願しています。会員資格をいい加減にして墮落したクラブは消滅しても仕方が無いと考えています。ロータリーはエリート集団です。但し、エリートの意味はいざと言う時に国家社会のために進んで犠牲が払える者と言う意味においてです。

ロータリー誕生の理念はポールハリスが設計されました、第一にファーストネームで呼び合えるような少年時代の友のような関係を作り出したかった。社会的肩書きをかなぐり捨てた「少年時代に戻れる一時間」を持つと呼びかけた。先ずは親睦有りきです。クラブ運営をスムーズにさせる為のクラブ奉仕の仕組み。そして、各自の職業を天職と心得、これに専念する事により、社会にその存在価値を見出し、お互いに活発な取引をし、繁栄した。やがて自分たちだけが繁栄していて良いのかと議論から、社会奉仕が出来、社会のニーズを先取りし、シカゴの町に公衆トイレを作った。これも見本を作っただけで、後は市に作らせています。会員クラブが国際的に広がり、国際奉仕の概念も出て来た。

一方、社会奉仕団体を目指した人たち（メルビス・ジョーンズ）は分裂しLIONSクラブを作ったと聞いております。

ポール・ハリスは熱心なプロテスタントですので当時発刊されたマックス・ウエバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」が基礎にあります。WASPから人種、宗教、カラーを取り除き、しかも倫理観が確立された団体を作りたかったのだと思います。

クラーク博士とポール・ハリスはニューイングランドの出身で同じクエーカー派のプロテスタントで、敬虔なクリスチャンです。

職業奉仕の考え方はクラーク博士の「少年よ大志を抱け」と非常に近く、倫理観溢れるものである。

「青年よ大志を抱け」

Boys be ambitious. (青年よ大志を抱け)

Not for money. Not for selfish accomplishment. (富や自らの功績の為ではなく)

Not for that evanescent thing which men call fame. (所謂名声と呼ばれるはかないものの為でもなく)

Be ambitious (大志を抱け)

For attainment of all that a man ought to be. (人が備えなければならないものを身につける為に),

クラーク博士

士

人が備えなければならないものとはベンジャミン・フランクリンの13の徳目に当たると思います。

節制、沈黙、規律、決断、節約、勤勉、誠実、正義、中庸、清潔、冷静、純潔、謙譲。

この各項目を習慣化するために、各週に一項目ずつを絞って実行し13週で一巡した。年に4巡廻出来る。こうして良い習慣を身に付け大成したそうです。

武士道を英文で書いた新渡戸稲造は欧米の方々に日本人の魂を正しく知ってもらう為に聖書の章句を引用して説明しています。特に「礼」については「コリント前書13章4節」の愛は寛容にして慈悲ありで説明しています。ロータリーの寛容もこれと関連して理解すると具体的でわかり良いと思います。

コリント前書第13章第4節

「愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬まず、愛は誇らず、驕ぶらず、非礼を行わず、己の利を求めず、憤ほらず、人の悪を念はず、不義を喜ばずして、真理の喜ぶところを喜び、凡そ事忍び、凡そ事信じ、凡そ事望み、凡そ事耐えるなり。愛は長久までも絶えることなし」

ロータリー綱領、4つのテストは理解すると同時にご自身が先ず実践される事です。職業奉仕がロータリーのロータリーたる所以でありますので、「ロータリーの職業宣言」はぜひ良く読み取り、自社の経営に取り入れて頂きたい。

2世紀目のロータリーは何を目指すのか、まだ始まったばかりですが、初期のロータリーとは若干変化して来ています。特にロータリーが自分達だけの幸せを追っていても、結局国際紛争が起き、無知、貧困、病苦の人達が地球上に存在する限りは、究極の幸せはないと考える様になりました。ポリオ・プラスの成功はこれを証明しています。現今では一部の国を除き、予防注射無しで旅行が出来ます。特に近来の交通の発達、交流、資源の世界的調達、流通は目覚しく。個人の幸せも、一国平和主義も許されない時代に入っています。ロータリー財団の平和奨学生制度はその際たるもので、この研究成果、

人材の育成が出来、国際機関で働き、啓蒙出来るようになれば大変なことになり f ます。

さて、ウィリアム・B・ボイド R I 会長のメッセージから「Lead the Way」は率先しようと訳されていますが、むしろ「実行は先ずはあなたから」が適切ではないかと思えます。

しかし、基本理念である「奉仕の理想」「超我の奉仕」「最も良く奉仕する者最も多く報われる」等は変わりません。

何故個人奉仕なのか、見本をロータリーで習い、自社で実施する、奨学金支給。社会奉仕 CSR 等はそれぞれの会社でやることです。

超我の奉仕とは利己心を取り去り、人様の幸せが祈れる訓練をする、布施のこころを養う事と思えます。

ロータリー財団寄付、米山寄付も自分が今在ることに感謝に報恩する気持ちでやるのが大事です。最も良く奉仕する者最も多く報われる。一見利己的に見えるが、目先でなく長期的視野に立ちお役立ちの事業を進めることです。

ロータリアンは変化を求める人と変化を嫌う人が居ます。易、不易の見分けが肝腎で、変えるべきは変え、守るべきは守ることを峻別するのです。即ち基本理念、創業の精神は変えないのです。形はどんどん変わってきます。

ロータリーは倫理運動である。簡単に言えば世間から後ろ指を指されるような言動はしないことです。結論では有りませんが、私たちの目指すものは何かの答えは後のパネルディスカッションで出るのだと思えますが、ヒントとして申し上げれば、「三方良し」の人生を歩む事と言えます。

「ただいるだけで」 相田みつを

あなたがそこに
ただいるだけで
その場の空気が
あかるくなる（くらくなる）

あなたがそこに
ただいるだけで
みんなのこころが
やすらぐ（くるしくなる）

そんなあなたに
わたしになりたい（なりたくない）

ロータリーは「我づくりの道場」でもあります。修身、齐家、治国、平天下、先ず自分自身を高め、家族円満で、しかも家庭が躰教育の場であり、会社経営は慈愛に満ちた家族的経営をし、関与先にこころを使い、人が育ち、社会にも必要とされる企業であり、

究極は税金（国家の会費）が払える企業体を目指し、最終的には世界平和を目指すことです。

一日も早くクラブの中心的存在としてご活躍されんことを念願しています。

ロータリー運動が目指すもの

P G 渡邊 隆

第4分区、第5分区の皆さん、改めてこんにちは。本日この情報研究会に連休中の貴重な1日にもかかわらず、ご参集いただきまして誠に恐縮でございます。皆さんのロータリーにかける情熱に対して心から敬意を表します。

今日の演題は、「ロータリー運動が目指すもの」となっておりますが、皆さんのご満足のお話ができるかどうか判りません。しばらくお付き合いのほどお願いいたします。

さて、そこで「ロータリーの目指すもの」を明らかにするために、まず創立後1世紀を経過したロータリーの歴史を簡単に振り返ってみたいと思います。皆さんご存知のようにロータリーの発祥は1905年（明治38年）2月23日、シカゴにおいて一人の青年弁護士ポール・ハリスの発想から始まったといわれております。この日集まった者はポールを始めとして4人です。当時ポール・ハリスは37歳。シカゴで弁護士を開業してまだいくらか経っておりません。ポール自身の語るところによれば、彼はアイオワ大学を卒業して後五年間、アメリカ大陸を放浪したり、イギリスへわたって様々な経験を重ねた上で、シカゴで弁護士を開業したわけです。これが1896年のことです。しかし彼の自伝をみますと「弁護士を開業するという事は予想以上に難しいことであった。弁護士事務所の看板を出すことは簡単なことである。それで多くの人を引きつけようなどと思っていたわけではなかったのだが、それが完全に無視されようとは思ってもいなかった。覚えている限りでは、私の商売は開店休業であった」（ロータリーへの道）という状態だったということです。

彼の故郷はヴァーモント州ウォーリングフォードという所ですが、たった一人で郷里を離れてシカゴで開業したところで、もちろん、そう多くの友達がいるわけではありません。しかもその頃のシカゴは「悪徳と腐敗の街」だったといわれています。例のシカゴの大火災の直後で人心は極度に荒廃し、商取引において詐欺まがいの行為が、日常公然とまかり通っていた状態だったということです。ポール・ハリスは、ここで弁護士を開業して正に孤軍奮闘していたのだらうと思います。そういう孤独の中から1業種1人というロータリーの組織のすばらしい発想が生まれてきたわけです。

4人の友人達が集まったときにポールは言います。「職業の違う者が定期的に集まろうではないか」「実業人も必ず心からの友人になれるはずではないか」と熱心に説いたといわれます。そしてその背景には各人の職業を通じてお互いに助け合える、あるいは助け合おうという考えがあったろうと思います。これが正に"ロータリーの原点"ではないのか。1906年1月に制定された最初の定款の第1条に「会員の職業上の利益の増進」ということが掲げられていることからしても、このことは明らかです。いわば相互扶助ということですが、この時の会員に大企業出身の人は一人もいなかった。こじんまりとした会合であったことに注目して下さい。いわば生きるための必要から生まれた、切実な要請の結果であったといってもよい。例えば、当時の例会において、前回の例会後一週間の間に、会員間においてなされた取引高の実績を、互いに報告し合ったと伝えられていますし"You scratch my back"(あなたが私の背中を搔いてくれる)という言葉に象徴されるような関係が、相互に期待されていたことがよく判ります。いふならば相互扶助ということが、まずその原点であったのであります。

しかしながら、ただ単に、それのみに止まっていたとしたら、ロータリーは今日みられるような隆昌を来すことはできなかつたろうと思います。すぐに間もなく相互扶助の狭い枠から脱して、目を大きく社会に見開き、さらに定款につけ加えて「シカゴ市の最善の利益を振興し、会員間に市民としての誇りと忠誠心を鼓舞すること」という1条が加えられました。

このようにして、ロータリーに一つの転機が訪れます。具体的には、シカゴ市内に公衆便所を作るという社会奉仕として表れるわけですが、さらに、職業奉仕の面について言えば「相互扶助」だけではあまりに閉鎖的で、将来必ず行きづまる時が来るであろうという批判が内部から出て参ります。そしてこのドナルド・カーターの鋭い良心的な批判に応じて、1908年には、アーサー・シェルドンの提唱によって、「普遍的な職業倫理の確立」の重要さが強調されるに至ったのであります。ついで、1911年にはそこから一段と進んで、オレゴン州ポートランドの大会において・ロータリーの二大標語として、今日我々の指針となる「超我の奉仕」と「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」に象徴される、いわゆる「奉仕の理想」の実践という崇高な目標が設定、自覚されることになったのであります。そうして、その一方で組織の上の拡大としては、やがてアメリカからイギリスに広がり、一層国際化するに従って、国際間の理解と親善に役

立つことを通じて、世界平和のために奉仕するという遠大な目標が設定されたことは、既に充分ご承知のとおりです。そして最近は、より具体的には、世界社会奉仕活動として目ざましい実績を上げつつあることは、今更いうまでもありません。

ところで、この機会に一言触れておきたいことは、ロータリーとライオンズクラブの関係についてですが、ライオンズクラブは1917年に創立されています。創立したのは、メルビン・ジョーンズという人で、この人はロータリーの個人的な奉仕にあきたらず、新しくライオンズを作ったわけですが、彼は単なる個人の奉仕ではなくして、団体として奉仕活動を実践すべきではないかというのがその主張の概要です。従ってライオンズでは"We serve"ということがそのモットーとなっております。ここに我々ロータリーとの差があるわけです。本来我々ロータリーは職業奉仕を目標とする個人からなる団体であって、個人の奉仕を主眼とし、そこに重きをおく団体です。単なる慈善団体ではありません。まして、団体として資金を提供すればそれで足りる、というだけのものではありません、私どもの目標は、個人として自己の職業を通じて、その実践倫理を実現することによって、広く他人のためにそして社会のためにいささかなりとも貢献しようとするものです。ここにライオンズクラブとは本質的な差異があるといってもよいと思います。しかしながら、ロータリーの歴史の中で、メルビン・ジョーンズが投じた一石は、我々に反省を迫る意味で確かに大きなものがありました。それが、やがて1923年のセントルイスの国際大会において決議34として白熱的な論議の結果決定されるに至ります。

そしてこの際、私が強調しておきたいことは、例の決議23-34において明らかにされたロータリー活動の原則にかかわる宣言のことであります。すなわち、そこにおいて、白熱的な議論の末に採択されたことの一つにこういう章がございます。

即ちこの1章はこの決議23-34の中の注目すべき基本的なそして決定的に重大な宣言でございます。これはもちろん、皆さん誰もがご存知のことと存じますが、改めて申し上げますと、利己と利他の調和の尊重すべきことを説いた次のような宣言であります。すなわち「ロータリーとは基本的には一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と、義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情との間に常に存在する矛盾を

和らげようとするものである。」そしてその意志を優先させる生き方がいかに大切かということでもあります。つまり、われわれが奉仕の理想としてかんげる「超我の奉仕」の根幹をなすものは、他に対する思いやり、他人の立場を配慮する人の心の優しさであります。換言すれば、自己に対する厳しさによる内省を伴う他に対する心くばりということでありましょう。そして他人との共生を計ることは、さらに広く他国との共存共栄を目指すことにもつながり、世界平和を希求する大道へと通じている筈であります、

そこで、今日、私が強調しておきたいことはロータリーの会員、つまりロータリアンの一人一人が、いずれもロータリーの「奉仕の心」に裏打ちされた職業人として、それぞれをかけがえのない友人として尊重し、それによって自らを磨く機縁として互いに影響し合いながら、それぞれの職業を通じて、世のため人のために役立たせること、それがまさにロータリーの存在意義ではないのか、それこそがロータリーの本来の目的であり、究極の目標として、われわれの永遠の課題ではないかと思うのであります。

4.そして最後に、ひとつ感動的なお話をご紹介しておきたいと存じます。それは関西のある地区のライラの際の講演として、いま、日本カソリック学校教会の会長をなさっている渡辺和子さんという方の話されたことですが、昭和史前半の最大の汚点ともいうべき。あの2.26事件。昭和11年2月26日、日本陸軍皇道派の青年将校達が暴走して、反乱を起こした日のことであります。このEI齊藤実内大臣、高橋是清大蔵大臣らが犠牲になりましたが、もう一人、当時陸軍教育総監だった渡辺錠太郎大将の邸宅にも暴徒数十人が押入りました。その時渡辺大将は当時小学生だったお嬢さんの和子さんと二人で書斎に居られたのですが、この和子さんがのちにノートルダム清心女子大学の学長を長く勤められた方なのです。反乱軍が入って来た時、渡辺大将は咄嗟に和子さんを机の下に隠しました。青年将校達は乱入するやいなや、渡辺大将に43発の銃弾を浴びせ、銃剣で滅多突きして、逆殺してしまったのであります。和子さんは、僅か1メートルも離れていない目の前で父親を殺されてしまったのですが…、こういう体験を経られた上で、のちに29歳の時にカソリックの信仰の道に入られたのであります。

そして、修道女としてアメリカのボストンに渡られた時の話であります。暑い夏の或る日、食堂で約130人位の夕食のために、皿とナイフとフォークをテーブルにセットする仕事をしておられました。その時、先輩のシスターが和子さんに「シスター和子、あ

あなたは今、何を考えていますか」とお尋ねになりました。彼女は「何も考えていません」と答えました。すると、その先輩のシスターは、厳しい顔をして、「あなたは、時間を無駄にしています」と。和子さんは自分の耳を疑ったそうです。「どうしてですか?」その先輩は「お皿とナイフとフォークを並べるのであれば、やがてその席にお座りになる方のために、何故、心の中で『お幸せに!』と祈りながら並べないのですか、何も考えないで、ただ漫然とお皿とフォークを並べるということは、時間を無駄にしているのです」と諭されたということです。和子さんは、「私は、今まで如何に効率的に仕事をするか、ということをお教えされてきましたが、時間に愛を込める、仕事に愛を込めるということは、初めて教わりました。時間に愛を込めること、お皿は同じ早さで、同じ姿で並びます。しかし目に見えない大切なものが込められるか、込められないかによって、世の中は大きく変わるということ、そこには、私がお幸せにと祈って置いたお皿で召し上がった方は、必ずお幸せになってほしいとの熱烈な願いがあり、つまり、私にとって、つまらない仕事はなくなったということ、お皿並べというつまらない仕事、雑用だと思っていた仕事は実はそうではない。雑用は、私が仕事を雑にした時に雑用になるということをお教えされました。「つまらないと思ってお皿を置くか、お幸せにと祈ってお皿を置くか。外から見た限りは同じように見えますし、かかった時間も変わらない。しかし、仕事の量は同じでも、仕事の質が変わっている、ということは、その人が変わったということ。」と述懐しておられたということです。お皿を並べるという単純な行為に愛を込めるように、自分のなすべき仕事に愛を込める。私達の全ての行動に愛を込めるということは、言い換えれば、倫理的な生活をなささいということであり、このように心の問題を重視するのがロータリーの奉仕なのであります。ロータリーの基本的な考え方は仕事に愛を込める、時間に愛を込める、自らの職業に愛を込める、まさに「ロータリーは人間の魂の在り方の問題である」とも言われているように、ロータリーの奉仕とは、心の問題を重視する優れて精神的な奉仕なのだということで、お翌丑を並べるという単純な行為に、他人の幸せを祈るという目に見えない大切なものが込められるか、込められないかによって、世の中は大きく変わる」ということでもあります。

5.これに対して最近のロータリーはどうでしょうか。これまで述べて来た「それぞれの職業を通じて世のため、人のために奉仕する」という考え方が、つい横道にそれて「お

金を集めて寄付すればそれでよい」という傾向に傾きすぎているのではないか。ここで強調しておきたいことは「思いやりの心は奉仕の物やお金を招き寄せることはあっても、物やお金はそれだけでは奉仕の心を充足させることは出来ない」ということを知るべきであります。ただ今の渡辺和子さんのお話にありましたように、奉仕とはまず心です。心の在り方をいうのです。ロータリーにおいてはこのことをどんなに強調しても強調しすぎることはないでありましょう。つまり、ロータリーとは具体的な各ロータリアンの一つ一つの行動を通じて、実践的な奉仕活動を通じて「奉仕の理想」を実現することを目的とし、使命としているものであります。

このことについて決議23～34にさらにもうひとつ重要な宣言があります。「ロータリーとは単なる心構えのことをいうのではなく、また、ロータリーの哲学も単に主観的なものであってはならず、それを客観的な行動に表さなければならない。そして、ロータリアン個人もロータリー・クラブも、奉仕の理を実践に移さなければならない。」ということです。そしてそういうロータリアンであってこそ、またロータリー・クラブであってこそ、大いに魅力あるロータリアン、真に意義あるロータリーだと誇りをもっていうことが出来るのではないか。それが私の今日結論としてお伝えしたいことでもあります。

ご静聴ありがとうございました。

以上 (H18.9.17)

